

戦闘機隊

- 1 通称号 威第一九〇二八部隊
- 2 編成時期 昭和一九年一月二日
- 3 編成地 三重県明野
- 4 展開

四式戦闘機、昭和一九年一月二四日 第三〇戦

闘機飛行集団隷下、ルソン島ボラックに展開
しレイテ作戦に参加。

一二月 マバラカットに展開、一部ネグロス島に
残置。ルソン島航空作戦及び特攻作戦参加。

二〇年一月三十一日 台湾潮州に移動、地上勤務者
はアバりに残置。

三月二八日 所沢に移動。

5 復帰 二〇年五月一六日 所沢にて復帰。

明野教導飛行師団、第三〇戦闘飛行集団に転属。
ネグロス、アバリ残置隊は二〇年九月二日停戦。

6 部隊長 高橋武（第三十八期）戦死。

井上幸男氏等整備隊は残置隊として終戦まで陸戦等
に従事し、多くの犠牲者を出しているのである。

ニューギニアへの

緊急空輸と現地生活

愛知県 高木 茂

私は人間にとって運不運というものはあると思いま
す。確かに、私は戦地において二度、九死に一生を得
たのです。

最初は昭和十八年、私達の部隊の初陣の時でした。
編成は九機編隊、私は二番機の正操（正操縦者）とし
て搭乗。後方基地より前日の午後出発して前進基地ま
で飛び、翌日の早朝出撃、北部印度支那レッド油田を爆
撃する予定でした。しかし私は午後三時頃より寒気を
感じ出し、我慢していたのですが、私の異変に同機に
乗る戦友たちも気付きはじめました。相当の高熱だっ
たと思います。

折角の初陣、喜び勇んで出撃するぞと心に決めてお
りましたが、高熱をおして操縦して前進基地に行く途

中もしもの事があつた場合、私だけではなく飛行機は勿論、同乗の六人の命にも影響があると考え、私は意を決し中隊長の所に行き、正操と副操の交代をお願いしたところ、すぐに中隊長も察し許可してくれました。

やがて九機編隊は出発、時間が経つにつれて私は熱のため苦しくなってきました。正操の飯田中尉が「おい、高木、大丈夫か」と、時々声をかけてくれるのでした。わたしは「ハイ」と返事はするのですが、はっきりとした記憶がありませんでした。

前進基地についた時にはグツタリとして自力で飛行機から降りることが出来ず、「おい、大丈夫か、しっかりしろ」と、皆に抱えられて自動車に乗せられたままでは僅かに記憶はありましたが、それ以後のことはぜんぜん覚えていません。

翌朝気が付いたのは午前十時頃、野戦病院の一室でした。木だ熱もあり、頭痛も激しい、デング熱だったのです。最も気になるのは出撃した飛行機のことでした。軍医に状況をたずねたところ、「今朝薄暗い中に

全機出撃、それ以後のことは不明」との返事、私としてはただ全機無事帰還することを祈るのみでした。

そして午後になって私の耳に入ってきた第一報は「確実なことではないが、全機（九機）自爆したらしい」とのことでした。その時の私の気持ち、何と表現したら良いか判りませんでした。昨日別れた一人一人の戦友の顔が浮かんで消え、消えては浮かび、それでもそれでも何とか無事であってほしいと祈つたのも空しく、自爆は現実のものとなってしまいました。

二度目は昭和十九年八月末から九月初めにかけての出来事です。私達戦隊はマレー半島の中央部にあるスンゲイバタニ飛行場を本拠地に種々な作戦訓練を行ってきたのですが、八月二十二日にボルネオ島アピ飛行場に転進命令が出まして、すぐに転進の準備を始めました。

航空隊の移動は地上部隊と違って空中勤務者、資材等、全部空輸しなければならないので、予備機も使って三往復で大体移動完了ということでした。この付近の空は安全だったので編隊を組まずに荷物を満載して

単機で空輸しておりました。

二度目の空輸が終わり一休みしているところに、戦隊命令が伝達されたのです。普通、命令は中隊命令として伝えられるのですが、戦隊命令とは不審に思いつつ指定されたところに行くと、児玉中尉以下六人揃ったところで第二中隊長から「児玉中尉以下六人、一泊の予定にて飛行団に出張を命ず」と伝達されました。

一泊の出張は空輸より楽しいと思いつつも、六人の編成には少し不審に思うところがありました。それは三個中隊からばらばらの編成で、私の中隊からは三人でした。そして戦隊は移動の真っ最中で、現在空を飛んでいる者、スングエイバタニ飛行場にいる者、ボルネオにいる者等ばらばらでしたので、こんな編成になるのかなと思つたものでした。一泊の予定ですので洗面道具以外は何も持たず、児玉中尉を機長に私は操縦、他に機関係、無線、射手二人の以上六人で飛行団に向かったのです。これが私の運命の大きな岐路となつたのです。

飛行団に着き申告しますと飛行団長自ら、「君達に

ニューギニア島ウエワクとの連絡及び緊急物資の輸送を命じる。ニューギニア戦線には十数万大兵士が非常に悪い状況下において戦っている。君達の任務は非常に重大である、是非、成功してもらいたい。飛行場の状態が最悪の場合は胴体着陸を覚悟していくように」という命令でした。この話を聞き、私は非常に驚きました。ニューギニアの状況の悪いことは聞いておりましたが、それ程とは思いませんでした。

三〇〇メートル級の脊梁山脈を昼間は敵の攻撃を受けるので夜間飛行で突破し、なるべく暗い中に着陸するように言われました。なるべく暗い中に着陸せよとは少し変な言葉だと思いました。夜間飛行なら暗い所を飛び、暗い所に着陸するのは当たり前のことだからです（しかし、これはニューギニアに着いてから判りました）。

命令受領、直ちに物資の積み込みを始めました。今回使う機種は「呑竜」ではなく、発動機に信頼性の高い「九七式重爆撃機」を使うことになりました。重爆とはいえ積載量は一トン、不必要なものは全て降ろ

し、命令文書・医薬品・電池等を飛行機の操作に関係ない所や、弾倉等にいっぱい積み込みました。機内は極端に狭くなり、昇降口からの出入りは無理で主翼から操縦席に入るといふ状態になってしまいました。昭和十九年九月三日午前十時頃、飛行団の飛行場を離陸しました。

ニューギニアまでの距離を、重爆の航続距離では一度に飛ぶことが出来ないで、名前は忘れましたが途中の小さな島にある飛行場に降りて給油等をしたのですが、飛行場の小さなことは空から見ただけでも感じました。物資を満載し、重い大きな飛行機、よほど慎重にと思い、児玉中尉に「狭いですね」と言うと、「重いから滑走距離が相当伸びる。いっぱい使うんだな」と。午後三時頃無事着陸しましたが、今度は直ぐに夜中に飛び立つことを考えました。絶対に失敗は許されない、重大任務の空輸なのですから。

夜十時頃まで休息し、出発準備をしていると、兵隊が来て「医務室に来てください」と言います。医務室に行くとブドウ糖の大きな注射を軍医がしてくれまし

た。十一時頃、自動車で飛行機の所まで送ってもらうと、機関係はすぐに飛行機に飛び乗り、夢中でエンジンその他機関の点検をしました。無線手・射手も自分の持ち物の点検整備をしていました。児玉中尉と私はこれらの作業を見ていました。機関係の「異常はなし」、点検係の「終わり」の合図に、私達は操縦席に座り「準備よし」。しかし、これから飛行場に出るまでが大変でした。この飛行場は主として小型機用の飛行場だったと思われるのでした。敵の攻撃から飛行機を守るため、飛行場から相当離れた所まで誘導路があり、飛行機を分散するようになっていのです。その誘導路は狭く、その両端にはヤシやゴムの木が生えており、飛行機の前哨灯の光だけで出なければなりません。ヤシやゴムの木に少しでも翼端を当てると一大事なので、児玉中尉は天窓を開けて誘導してくれるのでした。

いよいよ九月三日、夜中の十二時頃出発、約千五百キロの夜間飛行の旅です。飛行場の一端から離陸、エンジンの調子は上々。夜とはいえ敵の制空権下にあ

る所を飛ぶので、一瞬の油断も出来ないのです。飛行機の翼端灯も全部明かりを消しました。長距離、海上の夜間飛行ですので、兎玉中尉は航法に専念です。少しでも方角に狂いのあるのを知らずに飛行した場合には、とんでもないことになるのです。常に少しずつ方角を修正しながら飛びます。私は指示される羅針盤の度数を忠実に守らなければなりません。昼間の飛行の場合は地上の物体の流れを見て、海上の場合は波頭を見て飛行機の流れを計測し方角修正をするので比較的楽なのです。

九月四日午前四時だったと思いますが、兎玉中尉が突然びっくりするような大声で「おい、見えた見えた」と言うので、私は「何ですか」と聞くと、「あそこを見よ。あれがニューギニアの海岸線に間違いのない」と。よほど嬉しかったのだと思いますが私とて同じこと、私は常に羅針盤、僅かに見える地平線、他の計器等だけを見て飛行していたので、言われるまで気が付かなかったのです。

見える見える、たしかに海の彼方に僅かながら薄黒

く長い海岸線が。心は躍った、間違いなくニューギニア島に着いたのだと。やがて島の上空に到着したのですが、今からニューギニアの中央を走る脊梁山脈を越え、海岸の近くにあるウエワクの飛行場を探すのです。島の上空を飛行していると言っても、下は暗く何も見えません。山脈を越えると、やがて反対側の海岸線が見えてきました。兎玉中尉は下は暗くて何も見えない中を、海岸線の位置を探しておりました。暫くすると「よし、確かに飛行場はこの辺りだ。前哨灯を点滅してみよう」と言う声に、機関係が二、三回前哨灯を点滅すると、私は一斉に電気がつくと思っていたのに滑走路の形に点々と火が燃え始めたのです。他には何一つ照明はありません。

午前五時頃だったと思いますが、まだ暗く飛行場はよく見えないのです。高度をグンと下げ飛行場の上空を二、三回まわり「あそこに降りるんですか」「うん、そうだ。しかし、まだ暗いな」と更に二、三回まわると、滑走路が少しづつ見えて来ました。私は意を決して「降りましょうか」と言えば、「うん、降りよう。

しかしこんな着陸やったことは勿論、聞いたこともないな。充分気を付けて」と、このようにして着陸を決意。万一の場合に備え、機首の所にいる無線手になるべく後ろに来るように、また、他の人たちも充分注意するように伝えました。

いよいよ着陸体勢に入りました。私はこの時程、着陸の難しさを感じたことはありませんでした。着陸誘導灯も何もなく、薄暗い所への着陸、ただ必死でした。

地面がグッと近付く、操縦桿をいっぱい引く、車輪が地面につく、成功。心の中で万才、少しでも早く飛行機を止めようとブレーキを断続的に踏むのでした。

だんだん速度が遅くなってきた、もう大丈夫と思った途端、右車輪が地面にグッと踏み込み、飛行機は右に九十度くらい回り停止しました。どうしたのだろうと降りてみて判ったのですが、連日の敵機の爆撃で滑走路に点々と穴があいていたのを、私達の飛行機が来るというので急遽手作業でその穴を埋め、足で踏み固めたくらいだったので、その軟らかい所に車輪が踏み込

んだのでした。

昭和十九年九月四日、ニューギニアに到着。飛行機が止まるのを待っていたかのように、自動車数台が飛行機の周りに集まって来て、その中の将校が私達に「ご苦労様でした、直ちに荷物を降ろします」と言い、ドアを開け、物資を降ろし、自動車に積み込むことの早いこと早いこと。弾倉は少し地面についていましたが、漸く開くことが出来、積み込んだ物資も無事でした。全部の輸送物資の積み降ろしが終了した時には大分明るくなってきました。自動車はすぐに出発、猛スピードで走り出しました。

私達が飛行機を出ないうちに後方より敵機の爆音が聞こえてきました。漸くにてヤシの木に囲まれた司令部に着くことが出来たその時には、すでに私達が乗って来た飛行機に対し一斉射撃が始まっていました。着陸が五分遅かったとしたら、どんな結果になっていたかと思ひ、身の毛もよだつ思ひでした。この時になって、出発前に飛行団長が「なるべく暗いうちに着陸するように。また飛行場が最悪の場合は胴体着陸せよ」

と言われた言葉は、なるほどこういうことであつたかと思ひ出しました。敵は明るくなるのを待つて攻撃してくる、滑走路が穴だらけで正常な着陸不可能な場合には胴体着陸を、ということでした。

飛行場守備隊長に到着の申告をしたことによつて「ウエックとの連絡及び緊急物資の輸送」という大任は無事終了したのでした。昭和二十年一月十六日、私達六人はこの功績により南方軍司令官寺内元帥より感状が授与されました。

改めてあたりを見渡した時、アツと驚きの声をあげそうになりました。それは兵隊も将校にしてもこれがこの世の人の顔色かと、とても言葉では表現出来ませんでした。後になつてこの人たちと話をした時、彼等は私達を見て「おい、あれが本当の人間の顔色だ。太つてゐるなあ」と話したということでした。やがて私達も同じ運命を辿り、同じ顔色になり瘦せ衰えるののでした。飛行機の脚を壊し、プロペラを傷め、もう飛ばません。自分の部隊に二度と帰ることは出来ないのであらうか、「あゝ、運が悪かつたなあ」と考え込む

のでした。

暫く飛行機の部隊に務めていたのですが、戦況はますます不利となり、敵の上陸間近であるという話も聞くようになりました。当時、ニューギニアの食糧事情は非常に悪く、米・麦・調味料等、総て全然ありません。ただ塩だけは海に近いので海水から造るのですが、大勢の兵隊に配るのですから貴重品です。食糧は里芋の大きな親に似たタロ芋、ヤシの芽・新しい軸等でした。これは量は少ししかありませんでした。

主食は、ヤシの木からとれるサクサクという澱粉でした。これを配給してくれるのですが、栄養も無く、決して美味しいものではありません。これを湯でとかして、中に入れる具があれば入れて食べるのです。塩味をつければどうにか食べられますが、そのままでは全然味がありません。他に食べる物は無く空腹の毎日です。自分で作り咽喉を通します。食べると言つても配給は少なく、腹いっぱいどころか腹半分ぐらいです。それに消化が良いので直ぐに空腹になります。このような食生活なので、またたく間に栄養失調にな

つてしまいました。瘦せ、顔色は悪くなってきました。

私達がニューギニアへ着いた時に第十八軍司令部勤務を命じられていたのですが、前に書いたように「一泊予定の出張」ということで部隊を出たので武器は何もありません。牛蒡剣だけです。地上戦については何の訓練を受けたことも無く、非戦闘員のようなものです。

十一月頃山の中に転進するように言われ、私達と他の兵隊も一緒に、少ない自分の荷物をしょいこに縛り付け、「山を越え、谷川を歩き渡り、また山を越え」の連続でした。栄養失調で体力のない私には、あの苦しかったこと、今思い出してもゾッとします。そして、四十キロの行程をどうにか歩き、指定された部落に着くことが出来ました。

これから終戦、そして捕虜収容所（第十八軍全員）に行くまでニューギニア山中での原住民との生活が始まるのです。彼等の生活を見て驚きました。現在の世の中に、まだこのような生活をしている人達もいるの

だと。布、紙、種々な道具等を作る技術はなく、身につける物とは言えば、腰のあたりに植物の繊維で編んだものを少しつけているだけです。住居はヤシの葉を編み、それを簡単に重ね雨露を防ぐといったものです。

火は自分で起こすことが出来ないの、常に家の真ん中にあるイロリに太い枯木を入れ、そのさきに火をつけ、他の部分には砂をかけておきます。火種が絶えないようにするためです。外出する時には、その火種から細い一メートルくらいの枯木に火を移し、それを肩にかつぎ山道を歩くのです。目的地に着いた所で、担いできた火種で火を起こし、必要なものを焼いたり煮たりして食べるといった状態でした。当時は、平和で楽しい生活をしているように見えたが、老人たちの話によると、昔は部族間の闘争が激しく、切り取った敵の首を飾り、その数により勇猛さを誇ったものだそうです。

私達、二十人くらいが居住したのはニミンソリという部落でした。戸数は三、四十戸くらいと思いまし

た。山の峰続きに点々とあるのではつきりしないので
す。私達が部落の一番広く良い所にヤシ葺きの家を建
てたので、その近くに住んでいた人達は、他に移動し
たらしいのです。

次に私達の食事と言えば、毎朝、朝の点呼がすむと
部落の有力者に一人来るように言っていて、私達は
その有力者に「今日、バナナ何本、タロ芋何個、他に
野菜を頼む」と言うと、大体その通りに持ってきてく
れ、これが私達の主食でした。本当にありがたいこと
でした。

私達は特別な業務があるわけではないので、山の中
に入り、ヘビ・トカゲ・ムカデ・ネズミ等、生き物は
何でも採し捕まえ持ち帰り、また山の中の適当な所に
点々と穴を掘り、その中に落ちる動物を集めて焼い
て、不足する蛋白質の補給をしたものでした。

塩はどうしても手に入りません。運良く海岸に行っ
た者から少し分けてもらうことが出来ると、直接なめ
たりするとすぐ終わるので、唐辛子を細かく切り、そ
れを瓶の中に入れ、塩を少し入れよくかきませ、食事

のときに箸を瓶の中に入れ、それをなめては、その辛
さと塩気で満足したものでした。海岸にいた時のサク
サクと、タロ芋の生活とは大きな差。このニンソリ
での生活で私の体力も少しついて来ましたが、マラー
アは時々発作を起こし苦労しました。

敵は私達の山から一つ向こうの山まで攻撃してく
り、いよいよ決戦、戦死だなど決心した時、敵機が
飛来してきて、爆弾ではなくヒラヒラと紙を撒いて飛
び去りました。それを拾い読むと「戦争は終わった、
日本は全面降伏した」というビラでした。「うそだ」
と言うでなく、「負けたんだ」と言うでなく、ただ呆
然とビラを見つめました。結論として、敵の宣伝かも
判らないので上からの命令を待つということになりま
した。

二、三日経つと中隊本部より「日本は戦争に全面降
伏し、本日をもって戦争は終わった、もう武器は使用
しないように」という通達がありました。

暫くは皆、言葉もありませんでした。「戦争は終わ
った、負けたんだ、今までの苦労は何だったのだ、た

だ勝つことのみを信じて戦ってきたのに」「敵は眼の前におり、もう三、四日の命だったのが助かったのだ」という気持ちも皆の心の中にあっただと思います。私はこのようにして苦しいニューギニア生活を生きぬくことが出来ました。

私の本隊はボルネオに転進、私はニューギニアと、別々の行動でしたので確実なことは判りませんが、レイテの作戦、その他の戦線において大打撃を受け、大部分の人が戦死したとのこと。ニューギニアに来て運が悪かったと嘆いた私が生き残り、本隊にあった人達の大部分が戦死。私はこのようにして、二度の運によって助かったと思います。

ニューギニア戦線において、最も悲惨であったのは十数万と言われた第十八軍兵士が、生きて故郷の地を踏むことの出来たのは僅かに一万人足らずであったという事です。戦死者の大部分は餓死者とのこと、飢餓との戦い、敵との戦い、その苦しみは想像を絶するものであったと思います。